

震災ボランティアの社会学的研究 (1)

- 性別による分析 -

○高見 彰（関西女学院短期大学）、山口 泰雄（神戸大学）、土肥 隆（神戸商科大学）、
世戸 俊男（神戸YMCA）

キーワード：阪神・淡路大震災、ボランティア、期待と満足、イメージ

1. はじめに

阪神・淡路大震災のあと、阪神地区全体では、1995年1月からの3カ月で延べ117万人のボランティアの参加があり、被災地ではボランティア活動に対して、「若者がボランティアとしてよく働いた」「日本はボランティア活動の新しい時代に入った」「生きることは人とかわり合うことだと実感した」「ボランティア元年を迎えた」等々多くの社会的な注目を集めることとなった（高田裕之,1995）。その後、関西地区の大学においては、「ボランティアと社会的ネットワーク」など、多くのボランティアに関する講座や一般市民を対象とした公開講座が開設され、震災を機にボランティア活動を単位認定の対象とするようになった。また、兵庫県教育委員会では、震災で県立高校11校が避難所となり、ほとんどの学校で在校生がボランティア活動に参加したことから、1996年度から「ボランティア実践」といった選択科目を置くことを発表した。

このようにボランティア活動に関する制度化が進んでいる反面、震災の後、ボランティアは、「なぜ、自ら活動に参加したのか」、「何を考え、行動したのか」、「活動により、どのような影響を受けたのか」など、ボランティア自身の動機や意識、および態度変容に関しては、ほとんど知られていない。

本研究の目的は、阪神大震災において活動したボランティアの参加動機と活動に対する意識や態度変容の構造を明らかにし、ボランティア活動の活性化と組織化に向けての基礎資料を得ることにある。本研究においては、以下の研究問題(research problems)を設定し、性別による分析をすすめることでその解明を試みた。

- 1) 「ボランティアはどのようなきっかけで参加したのか？」
- 2) 「ボランティアはどのような動機で参加したのか？」
- 3) 「日常生活においてボランティア活動や規範行動をどの程度行っているのか？」
- 4) 「ボランティアは何を期待して参加したのか？また、活動参加により期待は達成（満足）されたのか？」
- 5) 「参加者はボランティア活動に対して、どのようなイメージをもっていたのか？また、活動参加によりイメージはどのように変容したのか？」
- 6) 「ボランティアは何を感じ、考えたのか？」
- 7) 「参加者の属性（性別、職業）により、参加動機や期待及び満足には違いがあるのだろうか？」

2. 研究方法

1) 調査対象

本研究の調査対象者は、1995年2月26日から8月27日にかけて「阪神大震災復興協力キャンプ」（日本YMCA同盟主催）に参加したボランティア1,004名で、回収した質問紙のうち有効票は1,002票（無効票2票）であった。

阪神大震災復興協力キャンプ（以後、ワークキャンプと略す）は日本YMCA同盟が主催し、5泊6日（原則）の日程で阪神地区に滞在し、ボランティア活動を行ったものである。

2) 調査方法

調査の方法は、質問紙を用い集合法により実施した。研究目的を達成するために、事前事後調査法(pre-post survey)を適用した。すなわち、ワークキャンプ初日におけるオリエンテーション直後に質問紙の前半部である事前調査を記名で実施し、ワークキャンプ最終日の活動後に質問紙の後半部の事後調査を実施した。データ分析には単純集計、クロス分析および記述統計を用い、性差による違いを検証するためにカイ二乗検定とt検定を適用した。

3) 調査項目

研究問題を検証するために、内閣総理大臣官房広報室(1983)、全国社会福祉協議会(1990)、山口ら(1989)、長ヶ原ら(1991)の先行研究を参考にし、8要因群19項目から構成される質問紙を作成した。質問紙における調査項目の内容とカテゴリーは表1に示す通りである。

表1 調査項目の内容とカテゴリー

要因群	項目	カテゴリー
属性	回答者の属性	1.性別 2.年齢 3.職業 4.居住地
動機	参加のきっかけ	1.友人・知人 2.新聞雑誌を見て 3.テレビ・ラジオから 4.所属団体を通じて 5.市町村の広報誌を見て 6.YMCAのポスターやチラシをみて 7.その他
	意志決定 参加形態	1.自分一人で決めた 2.友人と決めた 3.家族と決めた 4.所属団体を通じて決めた 5.その他 1.春・夏休み利用 2.年休を利用 3.ボランティア休暇を利用して 4.授業の一部 5.仕事の一部 6.その他
	参加動機 (26項目)	1.非常にあてはまる 2.まああてはまる 3.どちらともいえない 4.あまりあてはまらない 5.全くあてはまらない
ボランティア 経験	日常の規範行動 (9項目) ボランティア活動の頻度 (8項目)	1.していない 2.ときどきしている 3.かなりしている 4.いつもしている 同上
ボランティア 活動へのイメージ	活動イメージ (18項目) 事後のイメージ	SD法による形容詞対 (7段階尺度) 同上
キャンプへの 期待と達成	期待内容 期待した内容に関する達成	1.非常にあてはまる 2.まああてはまる 3.どちらともいえない 4.あまりあてはまらない 5.全くあてはまらない 同上
ボランティア活動 の内容と満足度	活動内容 活動満足度 (参加者との交流・地域のひととの交流・ワークキャンプの運営・ボランティア活動の内容・全体的な満足度)	自由記述法 1.満足した 2.まあ満足した 3.あまり満足しなかった 4.満足しなかった
継続意欲	ボランティア活動の継続意欲 キャンプの他者への勧め	1.非常にそう思う 2.そう思う 3.あまり思わない 4.全く思わない 同上
キャンプの感想	キャンプの感想や意見	自由記述法

3. 結果と考察

1) 参加者の属性

参加者の男女比は男性4割、女性6割で、学生・会社員といった10代、20代の若者が主力であった。

2) 参加のきっかけ

男性は「所属団体から」及び「友人・知人から」の直接的勧誘が多く、参加者の身近な者からの影響が大きい。女性は、「新聞・雑誌」「ポスター」などの募集広告による影響が大きい。また、男女ともに「テレビ・ラジオ」「市町村の広報紙」は今回のボランティア参加の情報源には、ほとんど影響を及ぼしていない。

3) 参加の意志決定

男女とも約半数の者が「自分一人で決めた」と答えており、「友人と決めた」者が約3割を占めている。学生を中心とする若者が大半を占めることから、「友人」が参加意志決定の際の重要な他者となっているのが特徴といえる。

4) ボランティア参加期間中の休暇の形態

男女とも「春・夏休み」「年休」など休暇を利用して参加した者が大半を占めるが、授業・仕事の一部としての参加は男性に多くみられる。

5) 参加動機

参加動機として、男女とも新聞やテレビ報道により被害を知り、被災者の窮状が他人ごとには感じられず、援助の仕方はいろいろあるが、とにかく、自分自身の目で現地を確かめ、救済復興の為に尽くしたい、その結果人間的に大きく成長したいという参加者像が浮かび上がり、進学就職に有利であるとか信仰上の理由からといった、代償を求めたり、特定の目的(理由)に縛られたものではない。

6) 日常生活における規範行動

参加者は全体的にプラスの規範行動を取っており、今回の参加者集団は社会的モラルの高い集団で構成されていたことがわかる。また、全体を通して女性は男性よりも規範が高い。

7) 普段のボランティア活動の実施頻度

普段のボランティア活動の実施状況は、男女とも全体を通して低調であり、ボランティア活動に慣れ親しんでいるものは少なく、今回のワークキャンプは「初心者集団」が組織化されて活動を行ったといえる。

8) ボランティア活動の内容

最も多かったのは、「被災者宅訪問・レクリエーション指導」で、次いで「被災者宅の訪問」「ガレキの片づけ・被災者宅

の訪問」となっており、参加者全体の6割がこれらの3種類の活動内容に従事した。「被災者宅や避難所への訪問」が活動の中心となっており、参加者の約8割の人が訪問を行い、被災住民との出会い・ふれあいを体験している。

9) ボランティア活動に対する期待

男女ともにボランティア活動参加前に期待の高かった項目は、表2、表3を見ると若干の順位に違いはあるものの、「手助けをしたい(手助け)」「被災地の現実を知りたい(現実を知る)」「普段では得ることのできない体験をしたい(普段できない体験)」「成長したい(成長)」「社会のために何か役立ちたい(社会に役立つ)」「被災地域の人たちとふれあいたい(ふれあい)」などの項目が上位を占め、様々な期待をもってボランティアに参加していることがうかがえる。また、女性は男性よりもボランティア活動に対する期待が高く、17項目中「自分のやりたいことを発見したい(発見)」「何か新しく感動できることを体験したい(感動の体験)」「自分の能力や技術を生かしたい(能力技術をいかす)」「新しい人と出会いたい(出会い)」「普段できない体験」を除く12項目に有意な差がみられ、ボランティア参加に求めているものも大きいといえる。

10) ボランティア活動参加後の満足

表2、表3より、全ての項目で男女ともに、満足している方にシフトしており、満足の高かった項目は「出会い・ふれあい」「現実・体験」のキーワードにまとめることができる。参加前には“与える側の立場”を意識して参加したが、現実には想像以上のインパクトがあり、自分の無力を感じながら、今までに絶対に得ることができなかった体験や人々との出会いを通して“何かを与えられる立場”に意識が変化し、最終的には自分自身が何かを学びとることができたという個人的項目に大きな満足を得ている。さらに、男性が女性よりも特に満足の高かった項目は、「手助け」「能力・技術をいかす」「社会に役立つ」の項目であり、自分の持っている資質を生かして、貢献できたという満足感が男性に強い。また、女性が男性よりも満足の高かった項目は、「出会い」「将来の仕事に役立つ」「長期的な援助の気持ち」「ふれあい」「ボランティアの勉強」「時間の有効利用」「新しい技術や経験」の7項目であり、ボランティア体験を通して感じたこと学び得たことに満足が高い。

表2 参加前の期待と参加後の満足(男性)

項目	参加前	参加後	p
手助け	1.66	2.26	***
発見	2.54	2.63	N.S.
感動の体験	2.29	1.88	***
能力・技術を生かす	3.03	2.78	***
出会い	2.22	1.36	***
社会に役立つ	2.07	2.37	***
自分を見つめ直す	2.42	2.16	***
仕事に役立てる	3.05	2.62	***
長期的な援助の気持ち	2.29	2.11	**
普段できない体験	1.96	1.46	***
共感	2.25	2.39	*
成長	1.98	2.39	***
現実を知る	1.92	1.64	***
ふれあい	2.09	1.93	**
ボランティアの勉強	2.36	1.95	***
時間の有効利用	2.69	2.28	***
新しい技術や経験	2.73	2.45	***

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

表3 参加前の期待と参加後の満足(女性)

項目	参加前	参加後	p
手助け	1.56	2.54	***
発見	2.51	2.54	N.S.
感動の体験	2.27	1.82	***
能力・技術を生かす	3.02	2.97	N.S.
出会い	2.11	1.25	***
社会に役立つ	1.89	2.55	***
自分を見つめ直す	2.27	2.06	***
仕事に役立てる	2.80	2.47	***
長期的な援助の気持ち	2.04	1.98	N.S.
普段できない体験	1.86	1.38	***
共感	2.09	2.33	***
成長	1.81	2.38	***
現実を知る	1.66	1.63	N.S.
ふれあい	1.85	1.78	N.S.
ボランティアの勉強	2.07	1.80	***
時間の有効利用	2.42	2.12	***
新しい技術や経験	2.46	2.25	***

***:p<.001

11) 参加前のボランティアに対するイメージ

男女ともに‘かなり’のプラス(肯定的)のイメージを持つ項目は、表4、表5を見ると若干順位が異なるが「自発的な-強制的な」「責任感のある-無責任な」「まじめな-ふまじめな」「信頼できる-信頼できない」「感動がある-感動がない」「積極的な-消極的な」の6項目である。これらの項目はボランティア活動を言い表す一般的なイメージととらえることができ、今回の参加者は震災救復復興ボランティア活動に対して、比較的純粋なイメージを抱いている。「人気のある-人気のない」「カッコいい-カッコ悪い」「不安がある-不安がない」の項目は‘どちらでもない’に反応していることから参加者のイメージの中には、人の目を意識するとか流行でといった価値観で活動をとらえていないことが分かる。

中でも女性は「積極的な-消極的な」「感動がある-感動がない」「楽しい-つまらない」「魅力的な-つまらない」「自

発的な－強制的な」「責任感のある－無責任な」「身近かな－無縁な」の7項目で男性よりも強くプラス（肯定的）イメージ側に反応している。

12) 参加後のボランティア活動に対するイメージ変化

活動参加後のイメージで、‘かなり’のプラス（肯定的）イメージを持つ項目は、表4、表5から18項目中、男性で8項目、女性で11項目となっている。男女で共通する項目は「自発的な」「積極的な」「責任感のある」「感動がある」「嬉しい」「信頼できる」「まじめな」「魅力的な」の8項目であり、女性にかなり肯定的であった他の項目は、「本物の」「身近な」「楽しい」の3項目である。参加後は参加前に抱いていたイメージを保ちながら、あらたに「魅力的な」「嬉しい」「本物の」「身近な」「楽しい」の項目が高くなった。このことは今回のワークキャンプでは、被災者との関係の中では、飾りたてた見せかけの自分では通用せず、あくまで本音でのつき合いが要求されたこと、自分の活動、誠意が認められたときの嬉しさ、被災者、ボランティア仲間同志の交流の中で体験した楽しさ、またこのような体験を通じて非日常的な震災がとても身近な存在となり、参加者のイメージ変容に、強い影響を及ぼしたものと考えられる。

女性が男性よりも肯定的なイメージを持った項目は「自発的な」「魅力的な」「身近な」「日常的な」「感動がある」「積極的な」「楽しい」の項目であり、女性は、男性より、ボランティア活動は身近かで日常的であると同時に魅力的で楽しく感動的であるというイメージをより強くいだく結果となった。

表4 参加前と参加後のボランティア活動のイメージ（男性）

項目	参加前	参加後	p
自発的な	1.83	1.93	N.S.
魅力的な	2.72	2.49	***
本物の	2.73	2.52	**
人気のある	4.00	3.58	***
責任感のある	2.07	2.04	N.S.
身近な	3.36	2.67	***
日常的な	3.60	2.97	***
かっこいい	3.76	3.71	N.S.
明るい	3.14	2.76	***
まじめな	2.33	2.38	N.S.
信頼できる	2.49	2.36	*
不安がある	3.82	4.06	**
感動がある	2.41	2.08	***
嬉しい	2.61	2.33	***
積極的な	2.10	2.01	N.S.
創造的な	2.90	2.71	**
自由な	3.30	2.89	***
楽しい	3.09	2.58	***

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

表5 参加前と参加後のボランティア活動のイメージ（女性）

項目	参加前	参加後	p
自発的な	1.68	1.76	N.S.
魅力的な	2.54	2.32	***
本物の	2.62	2.43	***
人気のある	3.98	3.44	***
責任感のある	1.92	1.97	N.S.
身近な	3.13	2.35	***
日常的な	3.42	2.52	***
かっこいい	3.69	3.70	N.S.
明るい	3.08	2.66	***
まじめな	2.35	2.45	*
信頼できる	2.48	2.46	N.S.
不安がある	3.70	3.93	***
感動がある	2.14	1.90	***
嬉しい	2.58	2.25	***
積極的な	1.80	1.83	N.S.
創造的な	2.87	2.58	***
自由な	3.24	2.84	***
楽しい	2.87	2.40	***

*:p<.05, ***:p<.001

13) ワークキャンプに参加しての満足度

①交流に対する満足度（対参加者、対地域住民）

ボランティア参加者同志の交流には、男女とも94%の者が満足しており、男性76%、女性80%の参加者が地域住民との交流に満足している。

②ワークキャンプの運営及びボランティア活動の内容に対する満足度

男女とも8割がワークキャンプの運営に満足しており、運営面に対する評価は高い。また、活動内容に対しては、男女とも8割の者が活動の内容に満足している。

③全体的な満足度

男女とも9割の者がワークキャンプ全体に対して満足を得ており、非常に高い評価を得ている。

14) ボランティア活動の継続意欲

男性が96%、女性が97%と非常に高い割合で、今後のボランティア活動継続の意思を表明している。

15) 周囲へのボランティア活動の勧め

男性79%、女性85%の参加者が周囲にボランティアを勧めたいと思っている。今回のワークキャンプで自分が体験した様々な感動、満足を多くの人達とわかちあいたいという気持ちの現れであろう。